

絵本に思うこと

柳田 英子

柳田邦男先生

初めまして。この初めての手紙で、絵本への思いをお便りすることに致します。絵本との関わりには、小さい時に母に読んでもらった、自分で読んだ、そして大人になり自分の子どもに読んだという期間がありました。更に時が経って今は、絵本の読み聞かせボランティアとして区立図書館や小学校で絵本を読んでいるところです。今年四月から始めたばかりですが、絵本を読む時間を再び持つ事ができて嬉しいです。そこには、〃心に残る〃という事を改めて思う時間がありました。読み返す度に、子どもが小さかった頃一緒に読んだ時の、指をしゃぶる音やお風呂上りのにおいや、小さくてプクプクした手の感触が、あふれるように思い出される時間がありました。再び手に取った絵本によって、これ程多くの思いが押し寄せるなどとは不思議な驚きです。

〃好きな絵本は？〃と聞かれて瞬時に答える一冊が、私にもあります。斎藤隆介さんの創作絵本で、滝平二郎さんの切り絵が美しい「モチモチの木」です。初めて読んだのは小学校高学年と思います。改めて奥付を見ますと発行後まもなく手に取った事になりますので、好きの両親が与えてくれたのでしょう。幼い時から本棚には絵本や本がたくさんありました。そんな環境であつた事も、私が両親に感謝する事の一つです。「モチモチの木」は、臆病な豆太が、大好きな爺さまが突然の腹痛で苦しんでいるのを見て、たった一人で冬の夜道を走って医者さまを呼びに行く。そこで、勇気のある子ども一人しか見る事の

できないモチモチの木に灯がともっているのを、豆太が見るという話です。『じぶんでじぶんをよわむしだなんておもうな。にんげん、やさしささえあれば、やらなきゃならねえことは、きつとやるもんだ。それをみてたにんがびつくらするわけよ。』―私は、爺さまのこの言葉が大好きで、私を応援してくれるメッセージと受けとめていました。大人になって子どもに読む側となった時、『モチモチの木に添えて』という作者斎藤隆介さんのあとがきを読んで、ぐつと胸が熱くなりそしてホッとした事を覚えています。斎藤さんはそこで、『人間のすばらしい行動の底には、やさしさこそが金の発動機（モーター）になっていることを、私と同じに信じて疑わぬ人なのだ。』と、切り絵の滝平さんを紹介しておいでです。私はその時、『斎藤さん、あなたがメッセージとしてお書きになられた事は、小学生だった私の心にもしつかり届きました。そしてそのメッセージをずっと覚えていました。』と。作者が意図した通りを受け取れなくてもよいのでしようが、発信された思いを知り、改めて感じるところとなりました。

又、『モチモチの木』は絵が動いて見える絵本です。『ねまきのまんま。ハダシで』走る豆太の絵。霜で真っ白な下りの坂道を転げる様に駆けるさまに、冬の夜中の暗さや冷たさ、心細さといった豆太の感覚を共有します。文が想像させてくれる世界を、絵がもつと身近で確かなものに引き上げてくれます。『モチモチの木にひがついている!』その絵は、小学生の時も大人の今も、黄色やオレンジ色の光がチラチラと揺れて灯って見えています。

絵本の読み聞かせのボランティアを続ける中で、目標があります。絵本の文と絵に、私の声が乗って、そこに子ども達が自分なりの音や

照明を想像して、一冊の絵本が舞台芸術のように立ち上がる空間を共有することです。大げさな様ですが、絵本を読む時間がそんな空間であるといいと、真面目にそう思っているところです。その体験を、柳田先生に又お使いできます様に努めてまいります。冬の絵本を選ぶような季節へと移っていきます。どうぞお風邪など召しません様、お大切になさってください。

十月三十日